

《ヒアリング調査報告》

図書館におけるデジタルアーカイブ事業

——石川県立図書館「SHOSHO ISHIKAWA」担当者へのヒアリング調査報告——

創生ジャーナル HS 編集委員会（文責：榎本 千賀子）

石川県立図書館は旧館の老朽化を期に移転し、2022 年 7 月に地上 4 階・地下 1 階建て、延べ床面積約 2 万 2,700 平方メートル、約 200 万冊の蔵書能力を持つ新館をオープンさせた¹。「百万石ビブリオバウム」の愛称で知られる新館は、通常の閲覧エリアに加えて、研修室やラーニングスペース、モノづくりや食文化を体験できる文化交流エリアが充実した、多様な知的活動に開かれた文化施設として県内のみならず県外からも注目を集めている。本ヒアリング調査では、新館オープンに合わせて新たに図書館が導入したデジタルアーカイブ (DA) システム「SHOSHO ISHIKAWA」を中心に、図書館における DA 導入の目的と運用、地域の情報基盤整備、新館建築の特徴など多岐にわたるお話をお聞きした。DA は文化面から、観光を支える取り組みとしても期待されている。インタビューに応じてくださった小山氏・競氏に心より感謝申し上げます。

（話し手）石川県立図書館² 小山弘昭氏、競荘介氏

（聞き手）藤巻一男、渡邊洋子、田中一裕、堀籠崇、並川努、榎本千賀子

（日時）2023 年 3 月 3 日（金）10：00～11：30

（場所）石川県立図書館

キーワード：デジタルアーカイブ、図書館、生涯学習、MLA 連携、文化複合施設

1

「石川新情報書府」の今

榎本 今日はよろしくお願ひ申し上げます。石川県は、DA の先駆的事业として評価された「石川新情報書府」を手掛けた経験をお持ちの自治体です。まずは図書館の DA 事業について、その前史となる「石川新情報書府」からお聞きしてもよろしいでしょうか。

小山 かつて石川県では、県の商工労働部という産業支援の関係部署で、「石川新情報書府 (Digital archives of Ishikawa Japan)」というホームページを作って公開していた時期がありました。これは、さまざまな動画などのコンテンツを Web 上から見られるというものでした。最初にこれを作ったのが 1996 年頃のことです。「石川新情報書府」を保存した CD-ROM の推奨 OS が Windows95/98 となっています。なお「石川新情報書府」のホームページは現在、利用でき

ない状態となっています。この CD は、中にアプリケーションが入っていて、それを通して動画を見るときう形になっていましたが、ファイル形式や、システムの条件が異なるため、例えば windows10 の PC の CD-ROM ドライブに入れてもアプリケーションは起動せず、当時のまま見ることは難しそうです。

榎本 当時としては、非常に先進的な事業として評価されていたそうですね。

小山 そのようです。ただ、こういうものがあったというところまでは、辛うじて調べることができましたが、新情報書府についてはこれ以上お話しできる材料がないので、当初の趣旨からは外れるかもしれませんが、今日は当館が現在持つ DA システムを中心にお話をしたいと思います。

「SHOSHO ISHIKAWA」

¹ 嘉門佳顕 (2022) 「石川県立図書館のリニューアルオープンについて」 カレントアウェアネス・ポータル、2022 年 9 月 29 日、<https://current.ndl.go.jp/e2540> (2023 年 10 月 29 日閲覧)。

² 石川県立図書館、金沢市小立野 2 丁目 43 番 1 号。

小山 当館、石川県立図書館の DA システムは「SHOSHO ISHIKAWA」と呼ばれるものです³。これは、利用者さんの目線から言えば、当館の所蔵資料のすべてを検索できるウェブサイトです。(図 1)。

このシステムは、当館 Web-OPAC とリンクしていますので、県立図書館が所蔵するもので「SHOSHO」で検索して見つけられないものはありません。NTT DATA さんの AMLAD という DA サービスを採用しています。また、一般の方向けに「SHOSHO ISHIKAWA」の使い方動画を、当館公式の YouTube チャンネルなどからご覧になれます⁴。

図書館としては、「SHOSHO」を様々な方に便利に使ってもらうことを期待しています。ただし、まだ道半ばというのが正直なところです。

「SHOSHO」では、図書の検索から貴重書、そして歴史公文書の検索までが、一括で行えます。旧図書館時代の OPAC では、一般書と貴重書では検索の方法が違っていました。それに対して、新館で採用した「SHOSHO」ですと、当館の所蔵資料の全てを検索対象とすることができます。このように、ワンストップサービスになっているというのが、この「SHOSHO」の大きなポイントです。

資料の分類を越えて、一体的な資料の提供を行うというのは「新石川県立図書館基本構想(平成 29 年 3 月)」⁵において基本方針のひとつに掲げられているものです。「SHOSHO」は、その具体化の手段という位置づけです。こうして様々な資料をまとめて検索することで、幅広い資料が、多くの利用者の目に触れるようになりました。

現在では、インターネットで検索して存在が確認できない資料というのは、ないも同然という考え方もあるほどです。ですから、「SHOSHO」では書誌情報しか見られないものが多いですが、画像や PDF で全体・全文を見られるものについては、この「SHOSHO」で検索をして、全文も閲覧できるようにしています。

さらに、新聞記事のデータベース機能も入っています。特に地元紙、石川県だと『北國新聞』さんが一番有名ですが、一般の方が調べもので過去の新聞



図 1 「SHOSHO ISHIKAWA」検索画面

をお探しになることは多いです。「SHOSHO」には新聞記事の見出しを検索できるように、その情報を入れておりまして、何月何日のどの新聞に関連する記事があるのか見つけられるようになっています。

ただし、実際の記事本文は、「SHOSHO」からは見られません。日付や掲載紙が分かったら、それを手掛かりに縮刷版を見る、というような使い方になります。

DA 継続のための 3 つの取り組み

小山 この「SHOSHO」運営のために行っていることとしては、現状としては大きく三つあります。DA というものは、一度完成させてしまえばそれで終わりではありません。最初にすごく気合を入れて作っても、後が続かなければ、お金も人間も無駄にしていまいます。ですから、続けていくための取り組みが非常に重要だといわれています。

そうした存続のための取り組みの一つとして行っているのが、主に貴重書を対象とした資料のデジタル化です。これは以前から行っていることではありますが、要するに「SHOSHO」から見られるコンテンツの数を、日々増やしていくことです。今日見ても、明日見ても、一カ月後に見ても載っているコンテンツの数が同じだよということになると、DA を閲覧する人は減る一方です。ですから、まずそこを怠らないようにしています。もっと具体的に言うと、資料の状態が良好で資料サイズがそれほど大きくないものは内製でデジタル化することを日々コツコツと取り組んでいます。

³ 石川県立図書館「SHOSHO ISHIKAWA」

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/shosho/> (2023 年 10 月 30 日閲覧)。

⁴ 石川県立図書館「動画で見る！SHOSHO(館内コレクション総合検索)」<https://www.youtube.com/watch?v=5d38ied5PRI>

(2023 年 10 月 30 日閲覧)。

⁵ 石川県「新石川県立図書館基本構想」

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/3260.pdf> (2023 年 12 月 19 日閲覧)。

大型絵図などは専門業者さんに頼むしかありませんが、そうでないものは、業務用のブックスキャナーを使って手作業でスキャンをして、それを「SHOSHO」に登録しています。

二つ目の取り組みとしては、当館主催で今年度からDAの研修というものを行っています。県立図書館については、「SHOSHO」というある種壮大なDAの導入にいったんは成功しました。けれども、市町村立の小さな図書館や、地域の博物館があります。そこでは数少ない司書や学芸員が、事務も、展示の企画も、資料管理も、何でもかんでも一人でやらなければならないという状況に置かれて、デジタルアーカイブのことまでは、なかなか知識や技術を身につけられないという実情があります。

また、外に研修に行くとしても、例えば主催者さんは「入門講座だよ」と謳っていたけれども「難しすぎた」といった声が、司書同士の属人的なネットワークの中で聞こえてくるのです。そこで、県立図書館の方で、本当に基礎の基礎からDAについて学ぶ入門講座を、開催し、県内の公共図書館、博物館を主な対象としての人材育成の手助けをしています。

そして最後に、三つ目の取り組みが、デジタルデータの利活用の促進です。これはいろいろな方法があると思うのですが、今図書館として代表的なもののひとつが、工芸図案の利活用です。明治・大正の工芸図案を、様々な分野のクリエイターの方々などに使ってもらおうという取り組みを進めています。

「SHOSHO」の動画でもありましたように、DAの資料を使って、ハンドメイド作品を作ってみる。プロの方にも、ぜひともデジタルデータを積極的に使っていただければということですね。

もちろん、小中学校の調べもの学習にこの「SHOSHO」を使って役立ててくださいとか、そういう働きかけも今後は必要だと思っています。

DAをしっかりと運営するということは、石川県だけではなく、国全体、世界全体のトレンドとも言えます。このデジタル化の流れに、石川県立図書館も遅れずについていこうということが、DA構築にあたっての基本的な認識です。

デジタル化の進捗状況と活用状況

小山 当館は、いわゆる貴重書といわれるものを多数含む特殊文庫を35文庫所蔵しています。例えば、有名なものと、『アトラス・ヌーボー』（図2）を当館一押しの資料として紹介させてもらうことが多い

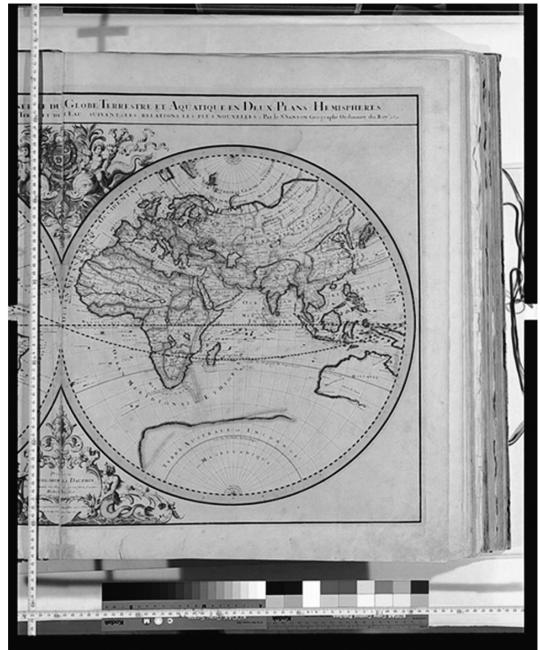


図2 加賀藩ゆかりの新世界地図図帳『ATLAS NOUVEAU』（1692年・パリ刊）

上の引用頁を含め、デジタル化された全ページを「SHOSHO」を通じてダウンロードすることができる。

です。こういった資料価値が高いものや、今風に言えば「映える」資料、絵的に見栄えのする資料については、新館の開館に合わせてかなり集中的にデジタル化をして、ほとんど作業を終えています。しかし、それ以外の資料についての作業は数としては進んでいますが、割合としてはまだまだ小さいので、これからも、少しずつやっつけていかねばなりません。

歴史公文書は、一番伸び代の大きい部分かなと思います。実は石川県においては、正式な意味での公文書館というものが、この新県立図書館の開館までありませんでした。ですから、戦前期の古い公文書を見たいという場合にも、通常の公文書と同じ、公文書開示請求というルールの中で利用してもらうという現状がありました。これは「そういう運用になっている」ということを分かっているけれどもまだよいのですが、知らない人からすれば大変不便な仕組みです。そこで、戦前、あるいはさらに昔、それこそ明治の廃藩置県以後の、そういう石川県の行政文書をより幅広く活用し、後世に残すために、この新県立図書館に公文書館機能を持たせることになりました。こういった公文書資料については、現在約2,400点(冊)の目録情報を「SHOSHO」で公開しています。

ただ、石川県はこれまで、公文書について、「実質的には非現用」の文書も現用文書と一体管理していましたので、歴史的な価値について精査していくべき文書が数多くあります。潜在的にはまだまだたくさん歴史公文書となるべきものがあります。ですから、開館に合わせて「取り急ぎ」で選んだものがこれくらいありますよ、というのがこの点数です。

工芸図案については、活用に力を入れて取り組んでいます。図書館2階にはものづくりコーナーというのがありまして、デジタル化した工芸図案を活用したスニーカーや九谷焼、小物入れなどの作例がショーケースに飾ってあります（図3, 4）。

デジタル化した貴重資料を、ペーパークラフトにするという使い方もしています。明治7年に金沢にも製糸場（金沢製糸場）が設置されました。当時としては富岡製糸場に次ぐ大変大きな規模の国営工場でした。この工場について、絵図が現存していましたので、貴重書の世界に少しでも親しみを持ってもらおうと、絵図をもとにペーパークラフトを作成しました⁶。

新図書館基本構想との関係

小山 石川県立図書館では、新館の開館にあたって基本構想を定めました。この基本構想が、完成した新県立図書館のソフト面、ハード面、つまり運営と建設の両面を含めた全ての基本コンセプトとなっています。

この基本構想を全て解説すると、分野が多岐にわたりますので、網羅的には正しい解説ができませんが、今日は「SHOSHO」と関連のあるところだけつまんで解説します。

そもそも、この県立図書館の建て替えのきっかけは、平成25、26年頃に、旧図書館の老朽化と、耐震基準を満たしていないという問題が明らかになったことでした。図書館は不特定多数の一般の方が大勢いらっしゃる施設なので、耐震基準を満たしていないことは大きな問題です。そこで、平成27年9月の県議会で、当時の知事が建て替えを正式に決めて、基本構想の策定作業が始まりました。

この基本構想は、「活気と賑わい」「県民のパートナー」そして「未来への懸け橋」「知と文化の象徴」という四本柱で構成されています。言葉だけ聞くと抽象的なところがありますが、建て替えが正式に決まっ



図3,4 石川県立図書館 ものづくりコーナー
デジタル化資料を用いた作例が飾られている。

ら、2年ほどの時間をかけてこの基本構想について、様々な有識者の方のご意見や、県内部での多様な議論を参考に練り上げていきました。

この基本構想の中では、8つの基本方針が定められています。「SHOSHO」は、このうちのおおよそ4つの方針と関わっています。

まず1つ目の方針は、新県立図書館では、豊富な資料にアクセスできる環境を整備しようというものです。これに対しては「SHOSHO」で全ての資料を検索できる、そういう体制を整えました。

2つ目の方針としては、この図書館の所蔵資料といいますが、図書館という施設そのものを、イベントや遊び、趣味、産業といろいろな用途で役立ててほしいというものです。これについても「SHOSHO」の紹介動画であつたとおり、使い方一つでどなたにとっても有効なツールとなり得るものだと考えております。

3つ目に、ワンストップサービスです。冒頭にも申し上げましたが、この「SHOSHO」というサービスが一つあれば、県立図書館の資料全てをワンストップで検索をして利用することができます。まさに、一体的に県立図書館の所蔵資料を提供するという仕組みが、「SHOSHO」によって実現しました。

最後に、貴重資料のデジタルデータの提供です。ただし、一点補足しておきたいのですが、石川県立図書

⁶ ペーパークラフト『加州金沢製糸場之図』

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/3714.pdf> (2024年2

月15日閲覧)。

館における DA 事業は、実は「SHOSHO」が初めてというわけではありません。「貴重書ギャラリー」という名前で検索すると、今も Google のキャッシュが検索でヒットします。検索で見つかるところまで、実際のページはもちろん今はありませんが。「SHOSHO」によって初めてデジタルデータ提供が始まったと思われる節もありますが、当館の DA はこのような歴史を経てきております。

DA 事業の運営体制について

榎本 DA 事業にはどのような組織で取り組まれていますか。基本構想が平成 29 年に策定されて今年で令和 5 年になりますが、その間に人員の入れ替わりなどありましたでしょうか。

競 これについては、DA 班というものを作って、設立から今に至るまでメンバー自体はずっと同じです。

渡邊 DA 班は何名で取り組まれていますか。

競 基本、司書 2〜3 名と行政職員 1 名だと思いますね。

榎本 司書さんが中心になってという形でしょうか。

競 業者との細かいやりとりは行政職が行います。ただ、どういう仕組みにしていけるか、こういうものを見せたい、そのためにはどういうものを作るべきか、ということについては司書がメインで取り組んでいます。

MLA 連携と市町図書館・博物館支援

榎本 MLA 連携に関しては、これからの課題ということでしたが、どの機関でも MLA 連携には苦労しているというのが現状だと思います。現時点ではどのような点に MLA 連携を積極的に進めるにあたっての課題をお感じでしょうか。

競 今は当館の「SHOSHO」自体をこれから充実させていかなくてはいけないという段階にありますので、連携というよりも、まずうちのシステム自体を充実させることを優先しました。

榎本 県内の図書館同士での連携についてはいかがでしょうか。例えば、市町の図書館の貴重書のデジタル化を県立図書館が指導する、あるいは援助するといった、そういった活動には取り組んでいらっしゃいますか。

競 県立図書館が、市町の図書館がデジタル化を行う際に財政支援を行うといった話はありません。しかし、市町立図書館がデジタル化を行う際に、最低限

の知識は必要だろうということで DA 入門講座を実施しました。県立図書館としてはそういう面から、サポートを行っています。

榎本 DA 化のためのブックスキャナーもお持ちだということですが、そうした設備や機材を、市町部の図書館に貸し出すということも、将来的には考えていらっしゃるのでしょうか。

競 それは検討してもいいことだと思っています。ただ、市町がそれに対応できる環境が整っているかどうか、という課題があります。

榎本 実施した研修の手応えはいかがでしたか。市町の方々というのは、業務に余裕のないところも多いかと思います。研修の結果、DA の取り組みに向けた積極的な反応などはありましたでしょうか。

小山 施設ごとに進展の具合や意欲が違いますね。参加された方も、上司から「うちは頑張るから聞いてこい」と励まされて来ている人もいれば、うちは全然そういう方針はないけれども、個人的に勉強したいから参加したという人まで、千差万別でした。ただ、来られた方は、リップサービスもありそうな気はしますが、自分のところの業務を進めるうえでも役に立てられそうだという感触を持って帰られたようです。また、お呼びした講師の方が全国でも指折りの業界トップランナーの方で、しかも、非常に優しい方ばかりで、講座終了後に「個人的に連絡をくれればいいよ」と声をかけてくださるという場面がありました。そういったプロフェッショナルな方々と直接話をして、パイプを作れたことが何よりの収穫だったという参加者もいましたね。

市民参加への取り組み

榎本 新石川県図書館基本構想では、県民参加型、あるいは県民共有型の図書館がうたわれていたかと思えます。DA に関しても、市民講座が開催されているとお聞きます。これについて、「SHOSHO」に関して、県民参加型、共有型というありかたは、どのような形で想定されているのでしょうか。

競 現状では、初年度ということもあり、手探りで取り組んでいるところです。今後の在り方については、年度末にかけてまずは館内で議論する予定です。現実にはこういうことをやりますというのは、現時点ではお答えできることがありませんが、県民参加型のありかたを視野に、検討を進めているというところです。

榎本 ウェブサイトで拝見しましたが、今年の 1 月にも「いしかわデジタルアーカイブ 入門講座&パネ

ルディスカッション」が開催されていますね。

小山 1月におこなったこのイベントは、DAを知らない人にも親しみを持ってもらおうという狙いもありました。ただし、正直なところ準備期間が短かったところもあり、DAについて、少しかじったことのある人でないと楽しめないものになってしまった、という反省点があります。

競 DAに継続して予算を付けていくためには、納税者の皆さんのご理解がどうしても必要です。しかし、DAについて一般の県民の方がご存じかというと、現段階ではそうではありません。そのあたりを、1月は啓発という形でイベントにしました。これについては、今回実施した反省を踏まえて、次年度はもう一回練り直して開催し、県民の皆さんに館としての考えをお示ししたいと考えています。

榎本 全国的に見ると、せんだいメディアテークの周辺など、市民の中でDAあるいはコミュニティアーカイブ活動が大変盛んな地域も生まれています。石川県内あるいは金沢市周辺では、自主的にアーカイブ活動に取り組んでいるNPO団体や市民団体はありますか。

競 現状では、こちらの耳にはそういった情報は入ってきていませんね⁷。

これまでの利用状況と事業評価

榎本 実際に「SHOSHO」が動きだして、これまでの利用状況はいかがでしょう。利用者からのフィードバックはありますか。

小山 アクセス件数などのデータが今手元になく、そうしたデータを公開もしていないのですけれども、貴重書を閲覧される方の利用が今のところやはり全体のかなりを占めているのかなと思っています。地籍図などの資料を探して「ふむふむ、じゃあこれを閲覧申請しよう」とか、そういう使い方が多くなされている気がします。

どうしてそのように感じるかというと、そういう使い方をされた方は、それ（自宅等で「SHOSHO」で検索した結果）を見て、その後実際に当館にいらっしゃるからです。館にいらっしゃれば、こちらの目に見えるわけです。それに対して、「SHOSHO」でパブリックドメインの画像データを使って自由に創作活動をさ

れている方というのは、館におみえになるとは限らないので、正直そこをきちんと可視化して捉えられていない状態です。

榎本 個別の創作活動を可視化するシステムは、なかなか作りにくいかもかもしれませんね。

小山 そんな気がしますよね。潜在的にはそうやって、すごく喜んで「SHOSHO」を使って、楽しんでいる方はいらっしゃるはずだと思います。ただ、「SHOSHO」のフリー素材を使って、商品が売れて儲かったとか、Twitterで話題になったとならない限りは、よほど意識しないとそういった方を具体的に探すのは難しそうな気がします。

榎本 ただし、長期的にDAを存続させていくための、今後の予算確保などを考えると、そのフィードバックシステムをうまく働かせられないと、なかなか厳しいところもありますよね。そのあたり、長期的なこの事業の評価方法については、今のところどのように計画されているのでしょうか。

競 そうですね。やはりそういうデータがあった方が財政当局にも言いやすいところがありますね。ただ、現状のトレンドとして、また県の現知事の方性としても、デジタル化を進めるという前提は確認できています。ですから、図書館が所有している知的資源を、一般に向けて公開し、県民との交流を深めていくということは必要なことだと、理想論的なところでは財政当局に要求できるはずですが、それでも、今ご指摘があったようなデータがあった方が、よりエビデンスベースで説明しやすいと思います。

藤巻 ダウンロードの件数などの把握は難しくないと思うのですが、そういう記録については、現段階では運用していないけれども、存在しているということでしょうか。

小山 私はその部分の担当ではないので正確な情報を今この場で持ち合わせていないのですが、それを示す、もしくはそれに近いデータというのは把握する必要があると考えています。

メタデータについて

藤巻 個人的な興味の話になりますが、先程コンテンツごとにいろいろなデジタル化の件数を書いてありましたね。写真だと所蔵が1000点あって1000点、す

⁷ 石川県内では、本インタビュー実施と同時期の2023年3月に、加賀市で市民参加型デジタルアーカイブ「かがが」（運営

主体：映像ワークショップ合同会社 <https://kagaga.jp/> 2023年12月19日閲覧）が公開されている。

でに 100%デジタル化しているということでした。写真のような資料は、いわゆる「映える」資料ですので、古いものがあればダウンロードする方も多いと思うのですが、例えばどのぐらいの時代からそういった資料はあるのでしょうか。また、資料の年代などのデータは「SHOSHO」ではどのように確認できるのでしょうか。

小山 資料一つ一つに書誌情報を登録していますので、「SHOSHO」で見れば、写真の撮影年などのデータも確認できます。ただ、デジタル化された写真の多くは、写真はあるけれど、撮影日などを特定する情報がないので「不詳」としている資料もあります。

藤巻 様々な貴重なコンテンツがデジタル化されていますが、基本的にはダウンロードが自由ということでしょうか。昨日、金沢市の観光政策課と一般社団法人金沢市観光協会の方とお会いした際に、多くの観光関連のパンフレットを見せていただきました。一つ一つが洗練されていて、写真の掲載も多くありました。中には時代的に古い写真も掲載されています。そういった商業的なパンフレットにも、「SHOSHO」に掲載されている資料は自由に使っていいということでしょうか。

小山 はい。大半は自由に使っていただけるようになっています。資料には、それぞれ著作権の状態を示すクレジット表記をつけています。これに従ってご利用いただくということです。数だけで言えばパブリック・ドメインになっているものが一番多かったかと思います。教育・非商用・商用とありますが、ここに3つ○が並んでいけば、自由に二次利用可能です(図5)。著作権については、マークとテキストに従って使っていただくというかたちになっています。また、解説のキャプション等の情報も「SHOSHO」では閲覧できます。

榎本 図書資料については、皆さん司書の方々ですのでメタデータの整理はもちろん問題ないと思いますが、例えば写真など図書以外の資料となると、技法などの書誌情報とは少し異なるモノ資料特有の情報も重要になってくると思います。そういった情報は、県立図書館では入れていますか。

小山 はっきりと分かる情報については、記載しています。ただし、はっきり分からない情報については、結局未入力のままこうやって公開させてもらっています。

榎本 図書以外の資料となると、司書の範囲を超える作業になりますね。



図5 「SHOSHO」クレジット表記

小山 そうですね。ただ、書誌情報を入れられるかどうかは、その資料の利用価値にも関わることですので、事後的に情報を追加するなど行っていきたいところです。

榎本 はっきりしない情報が一部にあるとしても、少なくともある程度公開しないと資料を使うことはできませんよね。専門家が資料を抱え込んで、全ての情報が完全に分かって整ってからでないと公開できないということになってしまうと、それはそれで良くないですよね。公開にはバランス感覚が大切なのだと思います。

地域資料連携の必要性

藤巻 金沢市は歴史のある街ですし、石川県全体も歴史が深い場所です。最も古い古文書などはいつ頃からのものをお持ちですか。基本的には江戸時代以降ということになるのでしょうか。

小山 当館には、時々「前田の殿様の書状はないか」という来館者がいらっしゃいます。しかしそういったものは、実はここではなく、金沢市の資料館の方で所蔵しています。前田の殿様の専門家がたくさんいると思われがちですが、実はここにはそういう人はいないのです。

榎本 地域の資料を網羅するためには、他館と協力・連携を進めないと難しいところですね。

「SHOSHO」はワンストップサービスを実現しましたが、現時点では館の限界があるということですね。

小山 そうですね。郷土資料については、もちろん収集には力を入れてはいるのですが、やはり各市町の職員の方がその市町のことには詳しいことが多いので、頼ることもあります。

教育への利用

渡邊 先程の利用頻度や活用実績の話とも繋がりますが、例えば大学をはじめとした学校関係や、その他の生涯学習活動といった領域で、積極的に

「SHOSHO」の利用を組み込むといった促進活動をされているということはありますか。

小山 私たちは二人とも歴史公文書・郷土資料課というセクションに所属していますが、この部署では、直接、売り込み営業的なことはしていません。ただし、当館では学校支援というサービスを昔から行っています。例えば、各学校で買えないような図書をまとめた数で学校に貸し出したり学校司書の方からのレファレンスに対応したり、そういうサービスを提供するなかで、「SHOSHO」でもこういうことができますよ」というやりとりはしているかなという感じです。

でも、本当はもっとそこに力を入れるべきですね。そして、たぶんそこに力を入れることというのはお金がかかるわけでもない。時間と人手はかかりますけれど。そうした取り組みを増やせば、社会科や総合的な学習の授業などで「ああ、これは使える」と思ってくださる先生がいるのかもしれませんが。ただ、いかんせん学校現場の先生方もなかなか余裕がないというところではとも思います。

渡邊 図書館のウェブサイトや、「SHOSHO」のウェブページを見せていただくと、とても若い人に向いているように思います。私はゼミの学生にも、URLを送って、こんな図書館があって、こんな検索ができるすごくいいサイトがあるよと情報提供したいなと思っています。若い人にもっと知ってもらってはいかがでしょうか。

大学生ですと Web 検索は慣れています、図書館のデータベース検索はすごくハードルが高いというか、あまり乗り気がしないようです。それに対して「SHOSHO」は、もうちょっと調べてみようとか、もうちょっと読んでみたいとかと思わせるようなデザインですね。すごくうまくできていると思いますので、若い人にももっとなじんでほしいと私は思いました。それで今の質問をさせていただいた次第です。ぜひ、専門学校生や大学生などに活用してもらい、触れる機会をつくってもらいたいです。大々的なプロモーションではなくても、こういうものがあるよ、ちょっとこうやって調べてみると、こんなことが出てくる、そういう情報を色々な場所で出していけると、それがきっかけ作りになるのではと思います。

競 そうですね。周知ということが大事ですね。図書館協議会という場がありまして、学校図書館協議会の代表の方とか、大学の図書館協議会の方とか、そういう方たちがおられるので、その方たちを通しては PR しています。また、連携推進グループという部

署もありますので、そちらでも PR をしているとは思いますが、さらにいろいろな方法がありえると思いますので、今後また考えていきたいところです。

渡邊 そうですね。せっかくのシステムですから、使われないともったいない感が強いです。また、昨日金沢市では「ボランティア大学校」の取り組みについても聞ききましたが、そうした取り組みにも、活用が期待できるように思います。

広報

堀籠 スタートアップというか、事業立ち上げ段階での発信は、どういう形でされたのでしょうか。私は DA や図書館が専門でも何でもないので、たまたま新潟県内でフリーランスとして活動されているデザイナーの方をはじめとした様々な方々が集まるプラットフォームに入っていて、「SHOSHO」の情報が流れてきました。恥ずかしながら私は全然知らなかったのですが、便利だなと思いました。「SHOSHO」の資料から、デザインの参考に使えるよと情報が流れてきたのです。

そのような経緯で、あの人たちはどこで、新潟と離れた石川県の情報を知ったのだらうと思ったのです。スタート段階では、どこで発信されましたか。メディアで、つまり普通に新聞等での報道があったのでしょうか。

競 新しい図書館が開館した当初に取材が殺到しまして、新聞や雑誌などのメディアでかなり取り上げられたので、県外の方でも結構ご存じの方が多いのだと思います。

小山 システムを提供している NTT さんも、マスコミに開館直前に「SHOSHO」のことを資料提供していたはずで。そういったこともあって、全国規模の広がりを見せたのではないかと思います。そして、それ以上に、7月、8月は本当に多くの人の Twitter で新図書館の写真などが拡散しました。そこから派生して「どんな図書館なんだろう」と調べた方が、おかげさまでその時期は本当にたくさんいらっしゃったと思います。

堀籠 歴史公文書に関しては、いわゆる研究者が活用を希望すると思います。こんな資料が公開されていないか、こんなのがあったらいいんじゃないかといったようなリクエストが、大学関係者や研究者からあったりもするのではないのでしょうか。そのあたりはいかがですか。

競 開館してから今までの利用状況でいうと、そ

ういった「SHOSHO」へのリクエストはあまり多くありませんが、「こういう資料がないか」という問い合わせ自体はありました。例えば石川県内で有名な橋として浅野川大橋というものがあります。しかし、この橋を建設したのが誰か分からない。八方手を尽くしても分からないけど、それに関わる公文書はないかということで、うちの方で探して、それをお見せしたところ、実際施工した人が分かるということはありませんでした。ただし、この資料を公開してほしいといった要望は、受けたことがないです。

地域の情報基盤整備のハブとしての図書館

堀籠 コミュニティの DA 化といった話題とも関わる話だと思いますが、それぞれの地域に残っている貴重な資料を、連携する形で便利に使える状況にしていこうということは、やはりデジタル化する場合の一つのメリットだと思います。その辺はどうなってくるのでしょうか。その辺の連携と役割分担の中で、石川県立図書館の立ち位置というか、ハブになってそのあたりをつないでいくみたいところは視野に入っているのでしょうか。

今の段階では、どちらかというと県立図書館が、まずはこの館単独で、着々とアーカイブ化を進め、便利に使っていこうとしているということは非常によく分かりました。もちろん、それはすばらしいことですが、図書館の外との連携についてはどうなのでしょう。

競 正直、初年度については日常業務で忙殺されているところがあります。館としては全県的な目標というものがこの基本構想にも書いています通りありますので、その点については、館全体で相談しながら進めていきたいと考えています。

榎本 国会図書館による全国の DA ポータルサイト「ジャパンサーチ」⁸との連携というのは、今のところは検討されていないのでしょうか。

競 「ジャパンサーチ」⁸との連携は担当者ベースの作業は進んでいるのではないかと思います。ただ、既にどこまで進んでいるのかというのは、この場ではちょっと。

榎本 石川県立図書館の取り組みは、県内での DA 先進事業ですから、ゆくゆくは県全体での MLA 連携

にあたっても、ハブとして期待される場所かという気がします。国レベルでの取り組みである「ジャパンサーチ」と県内の「つなぎ役」⁹を担う機関としても、期待されているのではないのでしょうか。

競 まあそうですね。県立として当然の話かなという感じはします。具体的なスケジュール感などをお示しできればいいのですが、現状では具体的なところに至っていないという状態です。

榎本 今は自館内の資料をデジタル化していくことが一番だということですが、ゆくゆくはおそらく市町の図書館であるとか、博物館などの、自前では DA 整備が追いつかないところへも目を配っていく必要があると思います。また将来的には、資料を積極的に探索していくという段階も訪れるのかなと思います。写真に関しては寄贈といいますか、新館オープンを期に新たに加わった資料があるようですが、「SHOSHO」ができたことで、今後はそういった機会も増えていくのではないのでしょうか。そのときの資料選定の基準や方針はどのようになっていますか。

全てのものがデジタル化できるわけではありませんので、限られた予算と人員で、どのように選んで順序を付けてデジタル化作業に当たっていくのかをお聞きできればと思います。

競 現状は本当に歴史的に価値があって、なおかつニーズが高いものという形で選んでいます。それだけでも結構な数があるので、それに予算を割いていくという段階です。(それ以外の資料、自館以外の資料については) そういった優先的な資料がデジタル化をし尽くしてから話だとは思いますが、その点についていみずれは考えていかないといけません。ただし、現状はそれを考えなくても、もう既に取り組むべきことが手一杯という状態です。

田中 電子図書の貸出や、ダウンロードといったことは、まだ考えられていないのでしょうか。

小山 県立では電子図書の取り扱いには行っていません。県内では、金沢市立図書館や、かほく市立図書館が実施していたはずですが。

田中 それはすみ分けているということでしょうか。

小山 金沢市さんでは画面上で読める電子図書を

⁸ 国立国会図書館「ジャパンサーチ」<https://jpsearch.go.jp/>
(2023年10月30日閲覧)

⁹ 国立国会図書館が運営する DA のポータルサイト「ジャパン

サーチ」は、領域や地域の中心となる大規模アーカイブ機関を、「ジャパンサーチ」と中小アーカイブ機関を結ぶ「つなぎ役」として、全国のアーカイブ機関を連携するという構想のもとに運営されている。

提供していますが、当館はまだ未導入で、具体的な予定もない、上手い言葉が見つかりませんが、検討中というところです。

こういうものにはやはり市町さんの方が敏感で、そういった市民のニーズに応えるのが市町図書館の使命というかスタンスの違いなのだろうと思います。

新図書館の設計・運用方針と DA

並川 今回私達は、DA を中心にお伺いするという事で来ていますが、他にも視察や団体の見学を受け入れていらっしゃるのかなと思います。そういった機会では、どういったテーマに関心を持たれて見学に来られる方が多いのでしょうか。

小山 一つは建物の構造がすごく特徴的なので、それを見に来ている方が多いのではないかと思います(図 6, 7)。視察受け入れの全体像が分かっていないので、印象になりますが、ただ、「建物を見に来た」が一番多そうな感じです。あともう一つは、テーマ別の配架ですね。テーマの配架と、建物の構造は、お互いにそれがあってこそという不可分な特徴です。ですから、この2つを皆さん一番興味深く現地視察をされているのかなと思います。現地を見ないと分からない部分です。DA のことは、それだけならば現地にわざわざ来なくても「SHOSHO」を見れば分かる部分が多いので、開館してから視察にいらっしゃっている多くの方々のお目当ては、建物だと思います。

競 ただし、視察のときには「SHOSHO」は必ず当館の特徴のひとつとしてご紹介しています。

田中 今回、われわれの視察の趣旨ということでは、DA のことを中心にいろいろお話を聞かせていただこうと思って伺ったのですが、事前にホームページを拝見させていただいた際に、やはり図書館の造りがすごくユニークというか、面白そうだなと感じました。そして、実際に図書館に入った瞬間、これはもう写真を撮りたくなるなというような、すごく面白い構造に驚きました。おわりの範囲で結構ですが、あれはどういうコンセプトでそのようなデザインになっているのですか。

競 そうですね。結局建物の基本設計等々については、私たちは建物が既に完了して、もうほぼ半分建ちあがった段階からの関わりですので、詳しくないのですが、それでも先ほどのどの図書館を参考にしたのかと併せて、把握している職員に聞いて、改めてお答えさせていただきたいと思います。

田中 何となく金沢駅前の「鼓門」とちょっと似て



図 6, 7 石川県立図書館

4階まで吹き抜けとなった閲覧スペースでは、同心円状に並んだ書棚に、テーマ別の配架が試みられている。

いるような気がします。

渡邊 図書館入口のすぐ右手に、ガラス張りになった面白いスペースがありますね。こうしたものは、新潟とは何かちょっと違うなと感じました。また、料理のできるスペースがあるなど、狭義の図書館機能に限らない施設が幅広く備わっているような気がします。

なぜここにこだわるかという、新潟をはじめ他の県ですと、図書館にこんなものがあるとおかしいだろうという声の方が強くなってしまって、「図書館は、図書館の目的に特化しなきゃ」みたいになってしまって、すごくつまらないというか、固定観念の中でしか施設が作れず、こちらの図書館のように、自由な発想でいろいろなアイデアを入れ込んで、みんなが楽しめる施設という発想にどうもならない感じがするのです。

そのあたりをお聞かせいただけませんか。例えば「図書館なのに、こんなものがあるのはどうなのか」というような市民の声はないのでしょうか。それとも、そういう声よりも、図書館という施設ではあるけれど、もっとユニークな、みんなが楽しめるような、みんなが親しめるようなものができるのが大事だと思えるような市民性が、石川県や金沢市にはあるのでは

ようか。そういうあたりが気になっているいろいろな質問が出ていように思います。そのあたり、別に詳しいことでなくても、お感じになっているところをお聞きできればと思うのですけど。

競 図書館条例で、当館の目的にも文化交流という項目が定められています。そうした条例に基づいて、例えば館内の「だんだん広場」ではオーケストラ・アンサンブル金沢が定期的に来て演奏しています。音楽に関する本を読むだけではなくて、実際に音楽に触れる機会を作るということですね。他にも、郷土料理についても、それに関する本を読めるというだけでなく、食文化体験スペースで実際に料理する機会を設けています。

また、図書館正面（南口）は、ガラス張りになっていると思いますけれども、ドアを全部開放して外の広場とエントランス、屋内広場を一続きの空間として使うこともでき、催事の幅も広がります。そういう、本だけではなくて、実際の体験もできる場所・機会を提供することで、相乗的に知識が深まるというふうにこの図書館では考えています。

図書館というのは基本的に静かであるべきだというふうに一般には思われています。しかし、当館ではそうではなくて、サイレントルームが別に用意してありまして、それ以外のスペースではしゃべっても大丈夫という形にしています。旧来の図書館像を持っていて「しゃべっている人に注意しろ」と言う方は一部におられます。それでも、基本的には今のようなコンセプトで、多くの方々にはご満足いただいているのかなという印象です。条例上に掲げた目的にも適っていますし、現状はあまりネガティブな声は聞きませんね。

榎本 「SHOSHO」の紹介 YouTube の中でも、図書館の中には、ものづくり体験ができる部屋がありますよという誘導がありましたが、資料や知識を活用する方向に力を入れているという感じなのでしょうか。

「SHOSHO」を作るに当たっても、新しい建物を造るに当たっても、そして図書館内で行われるイベントを組み立てていくに当たっても。

小山 石川コレクションの構築にあたり、創作活動に使えるようないろいろな資料も集めました。明治期

の工芸図案はその目玉のひとつと位置付けています。

国会図書館の調査¹⁰⁾によれば、1 年間で 1 回でも公共図書館を利用した人の割合は、41% のことです。図書館にめったに来ない 6 割の方にとにかく来てもらおうと、ちょっと図書館のこれまでの常識を外れるけれども、賑わいを作れるような場所にしようというのが具体化された形なのだと思います。

競 ニューヨーク公共図書館をテーマとしたフレデリック・ワイズマン監督の映画¹¹⁾などもありましたが、海外の事例もコンセプトを作る上では参考にはしていたようです。

渡邊 北欧の図書館で見た風景と、入ってきたときの印象が似ていたようにも感じました。

榎本 国内ですと、せんだいメディアテークなどが先行事例と言えるでしょうか。

競 せんだいメディアテークや、信州でしょうか。

榎本 県立長野図書館も DA で先進的な取り組みをしていますよね¹²⁾。

競 あそこは、神社などの資料を市民参加でデジタル化するという事業をやっていたと思います。そういう他県の事例については、今後 DA 事業を組み立てる上で参考にしていきたいと考えています。

渡邊 司書の方は職員全体のなかで何割くらいいらっしゃるのですか。

競 今はちょっと行政職が多いのですが、それでも 6〜7 割は司書です。この図書館を作るに当たって司書の定員を増やしました。

渡邊 では、司書の方は、そうした新しい形の施設についての情報などもすごく勉強されて、お仕事されているという感じででしょうか。

競 そうですね。そういう意気込みを持っている司書の方たちが働いています。ただし、初年度で想定以上にお客さんが来られて対応に追われています。次年度以降にその意気込みを実行に移していこうという感じだと思います。

委託スタッフとボランティア

小山 ちなみにユニフォームを着ている職員がいますが、あの方たちは TRC（図書館流通センター）の

¹⁰ 川島隆徳、渡邊由利子（2019）「図書館に関する意識：2014 年、2019 年の調査結果から」『カレントアウェアネス・ポータル』(<https://current.ndl.go.jp/e2225> 2024 年 2 月 17 日閲覧)。

¹¹ フレデリック・ワイズマン監督（2017）『ニューヨーク公立

図書館 エクス・リブリス』。

¹² 県立長野図書館「信州ナレッジスクエア」

<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/portal.html>（2023 年 10 月 30 日閲覧）。

委託のスタッフです。TRCのスタッフは、狭い意味では図書館職員ではないと言うか、スタッフではあるけれども県職員の身分はない方々です。当館以外の図書館でも非常に多く類似の実績をお持ちであることは私が言うまでもないことです。

渡邊 むしろそういう民間の力も入っているところ、柔軟性みたいなところにもつながっているのでしょうか。

小山 これも新館を機に、委託スタッフサービスに切り替えました。だから、ある意味、県に直接雇用、狭い意味での県公務員としての司書は、普通の貸出対応や整架、そういう図書館共通のルーティンな作業はお任せをして、コアな部分に注力しているはずでした。ただ、実際に運用してみると、意外とそうはいかないという部分があり、積極的な自己研鑽や研修への参加もどうしても後に後になってしまっています。そこは正直想定外だったのではないかと思います。

競 コンセプトとしては、司書が企画などのコアな業務に注力できるようにということで外部委託をしているのですが、今はその理念に届いていません。初年度の忙しさが落ち着いて、平常化してくれば、そういう当初の目的どおりの運用ができるのではないかとはいっています。

渡邊 さっきボランティアの方がいらっしゃいましたが、そういう方は募集を出して来ていただいているという感じですか。

競 募集を出して来てもらっています。

渡邊 ボランティア養成みたいなことは、今後考えていらっしゃいますか。現在は、図書館ボランティアの研修を行って、研修を受けた方がボランティアとして正式登録といった感じでしょうか。

小山 活動前に研修を受けていただくのが応募条件になっています。

また、おかげさまで当館のボランティアは人気がありまして、募集定員の分だけのボランティアさんに集まっています。

渡邊 現在ボランティアは何人ぐらいいらっしゃるのですか。

小山 30人ほどだったかと。ただし、年度ごとの登録としていますので、引き続きボランティアをされたい方も5年度の募集に応募していただくと。

堀籠 ボランティアで参加されている方々のモチベーションや目的は何かででしょうか。どういった心情でボランティアされているのでしょうか。

小山 私はボランティア業務に直接関わっているわけではないので、すみません、詳しくはわかりません。ただ、お仕事をされているところを拝見するときはしばしばありまして、「貸出機はこうやって使って、検索はこうやってできます」というように利用者の方にご案内されている姿からは、本当に図書館が好きで好きでという感じがします。

渡邊 司書の資格を持っている方などもいらっしゃいますか。資格を持っているけれど、働くというよりはちょっとボランティアをまずしてみようといったような。

小山 詳しいところはわかりませんが、もしかしたら中にはこういうボランティア経験を就職活動に活かしていきたいという人もいるかもしれません。想像ですが。

榎本 新潟の十日町情報館では、古文書講座から派生して、単なる単純作業ではなく、資料の整理や、館内での展示企画までボランティアの人が関わるようになったという事例を聞きました¹³。そういったボランティアの方々の積極的な動きはありませんか。そうなってくると、かなりやりがいのある活動となりますが。

競 そこまでいったら、ボランティアと呼んでいいかどうか。

榎本 十日町は非常に熱心な担当の方がいらっしゃって、そういう形になっていますね。DAの市民講座がだんだんそういうふうになっていくとか、そういう可能性はないでしょうか。市井の人たちが撮っている写真など、近現代史的なところでは、市民にとっても身近に感じられる資料を扱うことが可能な場面が多くあると思います。DAを機に、コミュニティアーカイブ的な市民の活動を育てられる可能性は大きいように思います。

アーカイブのアーカイブ

榎本 DAへの希望としてはもうひとつ、「石川新情報書府」に関しての要望があります。これは石川県内だけでなく、全国でもかなり先進的な事例の一つだと思います。Born-Digitalな地域資料の一つとして、

¹³ 高橋由美子(2018)「十日町市古文書整理ボランティアのあゆみ—市民参画による資料整理の意義と展望—」『記録と史

料』28(0)、10-14頁。

ぜひ全部サルベージしていただけたらありがたいです。DA 業界でも、「石川新情報書府」や「Wonder 沖縄」などの草創期の DA が、優れたものであっても埋もれて見られなくなり、過去の活動の詳細を分析することができないことが問題になっています。

せっかくお金をかけたものでもありますし、今ならたぶんそこまで力を入れなくても見られる状態にできるのではないのでしょうか。時間がたてばたつほどサルベージは難しくなっていくはずです。

小山 確かに、今ならたぶんまだそんなに手をかけなくても救えますね。CD-ROM もどんなファイルが保存されているかまでなら事務用の普通のパソコンで見ることができるので。サルベージできても、当時の画質までは再現できないかもしれませんけど。

榎本 いや、それでも十分価値があると思います。CD-ROM 自体も物理的にそろそろ危なくなってくる時代ですので、ぜひお願いします。非常に意味ある取り組みになると思います。

渡邊 今日は長い時間、本当にありがとうございます。

追記

本稿編集中の 2024 年 1 月 1 日、令和 6 年（2024 年）能登半島地震が発生した。この災害を受けて石川県立図書館は、同月 19 日に県内の復旧・復興に向けた図書館活用案内を Web サイト上に掲示している¹⁴。案内には館内での震災関連情報の入手方法に加えて、新聞データベースの提供がない北陸中日新聞については、「SHOSHO」を用いて震災関連の見出しが検索可能であると紹介されている。災害直後の復旧・復興を目的とした図書館による情報提供業務に「SHOSHO」が活用されたのである。

これまで災害と DA の関係は、主に災害記録や災害伝承の観点から語られてきた。しかし、今回の石川県立図書館の対応からもわかるように、DA は災害発生時やその後の復旧・復興時における情報提供ツールとしても活用可能である。だが、この観点からの DA 検討はまだ不足している。このような状況のなかで、能登半島地震後の石川県立図書館の対応と「SHOSHO」の利用データは、社会情報インフラとしての DA のあり方を考えるうえで、極めて貴重な事例となることだろう。

最後に、震災対応が続くなか、本稿の校正に応じてくださった小山氏に重ねて感謝申し上げます。

¹⁴ 石川県立図書館（2024）「令和 6 年（2024 年）能登半島地震からの復旧・復興」

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/category/booksearch/4119.html>（2024 年 2 月 15 日閲覧）